

金田 平

(財)日本自然保護協会理事

<エコツーリズムが非日常のままで良いのか>

夏が来ると思い出して、遙かな遠い尾瀬に行って「ゆっくりと見回せば、見えなかった色、気付かなかった香りに気付き、おおらかな一步をしるせる」だろうことを否定するものではない。しかし、尾瀬を歩きすばらしさに感動し、後世に残されるべき貴重な所だと認識してくれば良いのだろうか？其処が残されるためには、旅行者自らが日々の暮らしの中で何をなすべきかが認識されなければならぬ筈で、それがエコツーリズムだろう。

旅行者が尾瀬で受け止めた様々の感慨も所詮その時のものでしかなく、尾瀬では気にして持ち帰ったゴミにしても、家に帰ればゴミなど気にもならないのが旅のパターンではないだろうか。「旅の恥は掻き捨て」も同様、要するに昔から旅は非日常なのだ。

日本自然保護協会では「いつでも、どこでも、だれとでも自然観察」を目指し、自然観察会運動をすすめてきた。その経験からすれば、エコツアーを特別な旅とすればするほど、それは非日常となるだろう。今回、エコツアーの対象が 原生自然 里地・里山 観光地に整理されたが、其処にはそれぞれ人の生活があるはずで、其処での暮らしを見せ、考えさせ、人の生存環境がどうあるべきかが投げかけられなければならない。その場所場所での暮らしへの理解が環境改善に役立つはずだし、それこそがエコツ リズムの目的だろう。

原生自然保護の制約が掛かった土地での生活は厳しい。里地里山のくらしは、高度経済成長政策以来、難しくなっている。歴史を抱えた地域の暮らしも制約が大きい。豊かさと便利さに満たされた都市生活者を支える社会構造が更にエコツアーの対象地となるような地域の暮らしを厳しくしている。こうした様々の形を理解し、支えるために組まれるのがエコツーリズムだとの認識が必要だ。そのためには、生活をそのまま見せ、生活者が案内人になるエコミュージアムなどが効果的だろう。其処での理解が更に、自らがそれにどう関わることが出来るのか、どういう形で支援できるのか、というところまで深められて初めてエコツーリズムたりうる。つまり、平素から自らの生活環境をみて改善努力をする生活がエコツアーをより効果的にする基本だ。まずはエコツアー参加を機

会に、帰ったら、前と違った生活が始まるようなインパクトを与えることが求められる。